

今月号より四万十市ふるさと応援団の団員の皆さまからのお便りを紹介します。

## 竹屋敷の思い出



茶畑 春月  
愛知県碧南市  
昭和5年生まれ

四万十市のみなさん、こんにちは。私は現在愛知県碧南市で故郷の絵を描き過している茶畑春月と申します。故郷は四万十市竹屋敷で、四方山に囲まれ、自然に恵まれた呑気な土地柄のいい処でした。

私は子供の時より絵が得意で、父に「この子は鉛筆と紙を渡しておけば一日中絵を描いて遊んでいる。」と言われたものです。

昔、竹屋敷ではランブに囲炉裏の生活で、ほとんどの家庭が自給自足の様なもの。家の庭にみかんの巨木があり、隣近所に「馳走できました。梨柿などもこの家でも作ります。時折乾物、魚売りが来るだけ。店屋ではなく山や川から調達し、食した時代でした。

朝は鶏の声、お日様の高さで時間を見、奥の堂ヶ森を眺めてかかる雲で天気を見ていました。堂ヶ森は私達にとっては神山、老人にはこの山に手を合わす人もあり、若者にとっては縁結びの山として人気がありました。

この山を取り巻くように四万十川は流れ、崇められていました。堂ヶ森から吹下ろす風は強く、天然木がギイギイと鳴っていました。山師が木材を切り出すと、木馬を使い牛引きさんが貯木場まで

運び、そこから荷馬車で町へ。加工されて阪神方面へと運ばれて行きました。

竹屋敷は堂ヶ森の南の袂で、家から竹屋敷川に沿う道を下った古尾崎には六軒位の店があり、日常の用事はそこでほとんど済みました。小学校入



茶畑春月作「堂ヶ森地蔵祭り」

学の前には、中村の町まで約五里の道のりを母に連れられ歩いて買物に行きました。道路も広がり、各家庭に電気が灯り便利になったのは戦後のことです。

田舎では長男が相続して親を見、次男以下は職人になるか都会の会社へと出て行き、正月や盆に

帰省し、共に出世を競ったものです。

私は次男でしたが、不況の折、安定した職を求めて両親妻子一家七人で愛知県へ出ることにしました。肖像画家の道を一時休み、瓦会社に籍を置き懸命に働きました。そして定年退職後に再び絵の道に入り、カメラとスケッチブックを持って野に山に。個展も何回か開催することができました。

私が再び堂ヶ森に登ったのは平成五年のこと。昔とは違い車で登れるので楽です。お地蔵さんにお参りをしている旧友達が声をかけてくれましたが、浦島太郎のように誰が誰やらさっぱりわかりません。親の顔に似ていたり話をしていくうちにやっとわかってきました。懐かしい風景をカメラに収め、子供力士や女相撲を見て楽しい一日となりました。

そののち平成十年にパーキンソン病と診断され、大穴に落ちた気分でしたが、生まれ育った故郷の思い出、七十年昔からの時の流れを知っている限り書き残しておこうと決心し、震える手で描き続けてきました。そして『茶畑春月故郷記』(一)、(二)を出版することができたのです。これを故郷の図書館に寄贈したところ、四万十市長の田中氏がご覧になって交わりができました。

市長も五月五日の地蔵祭に堂ヶ森に登られると聞き、地蔵祭の絵を贈らせて頂き意気投合。四万十市ふるさと応援団に入団し、この度の寄稿となりました。

今こうして故郷四万十市の皆さんと縁が繋がったことに深く感謝しております。

茶畑氏から寄贈された「堂ヶ森地蔵祭り」の絵は、市役所3階商工課横の通路に展示、絵本『茶畑春月故郷記』(一)、(二)は、市立図書館に所蔵、貸出しています。

いずれも素晴らしい作品です。ぜひご覧ください。